声なき叫び 沖縄の心

写真は毎日新5月5日特集。本土復帰から2022年5月で半世紀を迎える沖縄。76 年前の沖縄戦で犠牲になった人々の遺骨が残る本島南部の土砂を、米軍普天間飛行場（沖縄県宜野湾市）の名護市辺野古移設の埋め立てに使う計画が持ち上がっている。「人の道に外れている」「戦没者や遺族の思いに反する」遺骨の上に基地を造るかのような計画に、怒りと中止を求める声が渦巻く。

名護市辺野古の米軍新基地建設で、防衛省は 2020 年 4 月、埋め立て用の土砂採取計画に 76 年前の沖縄戦の激戦地だった沖縄本島南部を加えた。22 年 5 月 15 日、沖縄は「本土復帰」から半世紀となるが、南部（陸域と海域）は復帰時に国内唯一の戦跡国定公園に指定され、今も戦没者のものとみられる遺骨が見つかる。沖縄の住民や全国からの軍人、軍属、米兵や朝鮮半島出身者らの遺骨が混在していると推定される。

遺骨収集ボランティア団体「ガマフヤー」代表の具志堅隆松さん(67)=那覇市=らが「基地の賛否以前の問題。人の道に外れている」と 21 年 3 月、ハンガーストライキで抗議。本土と沖縄の若者たちが呼応し、中止を求める緊急声明を発表した。

その呼びかけ人代表の西尾慧吾さん(22)=大阪府茨木市=は「沖縄の基地問題は私たち全員の問題。ヤマトンチュ（本土の人々）の一人として申し訳なく思った。構造的な沖縄への差別にほかならない」と声明を呼びかけた背景を語る。そして「具志堅さんが『戦没者の骨が混じり血や肉が染み込んだ土地』と本島南部を表現するのは、今も沖縄戦の記憶があり続けていることを示している。遺骨の混じる土砂を戦争につながるかもしれぬ新基地の『建材』に使うことは戦没者や遺族の思いにも反する」と強調した。西尾さんは、沖縄と本土との温度差に危機感を抱いた。「新型コロナウイルスの感染拡大への公的対策、人種差別問題、福島第一原発事故後の汚染水処理などについて、市民から批判が巻き起こっているのに沖縄の基地問題は置き去りにされている」。約 60 人の賛同者と 3 月 6 日、ウェブ上で「緊急ステートメント（声明）」を発表。国や県に本島南部の土砂採取計画の中止を求め、「日本全体が沖縄を巡る問題について当事者意識を持って学び、議論する、開かれた場をつくる」ことを提言した。

（2021 年 5 月 15 日）